

日本語を中国語にスラスラ

人工知能使って 翻訳ソフト開発

広島市立大の任助教



多言語間の翻訳ソフト開発に取り組む任助教(手前)と馬講師

慣用語、文脈で判断

このソフトは日本語と中国語の単語の対応をコード番号化して認識するほか、「決してない」など、日本語特有の呼応関係を持つ言葉もコード化して翻訳する。また、日本語の慣用表現の翻訳にも独自の工夫を加えた。例えば「首を切る」という言葉の場合、言葉通りの意味か、「解雇する」の意味の慣用表現かを前後の文脈から判断するようにして、翻訳の正確さを向上させた。

英語の翻訳ソフトの技術では対応できなかった。今回の人工知能の技術を使い、任助教は広島市立大客員研究員として来日中の大連理工大の馬洪明講師(ミラウ)と協力し、日本語を英語に翻訳するソフト開発も進めている。

任助教は「英語だけでなく、世界のさまざまな言語の間で情報のやりとりが自由にできてこそ、コンピューターの世界的なネットワークが威力を発揮する」と話している。この翻訳ソフトは、大阪の業者により製品化、販売されている。

広島市立大の任助教は、中国大連理工大の研究グループと共同で、人工知能の技術を応用し、日本語を中国語に翻訳するコンピューター・ソフトウェアの開発、実用化に成功した。中国四川省出身の任助教は、どのように日本語から英語への翻訳など多言語間の翻訳ソフトの開発にも取り組んでいる。

さらに、長文翻訳では、

- ①長文を短く区切る②慣用表現を抽出する③辞書を管理し、新語を調べる④全体の作業をコントロールする
- などの役割を分担し合う「家族モデル」という手法を使い、早く正確な処理を実現した。

外国語の翻訳ソフトは、コンピューターの普及が英語圏で先行したこともあ